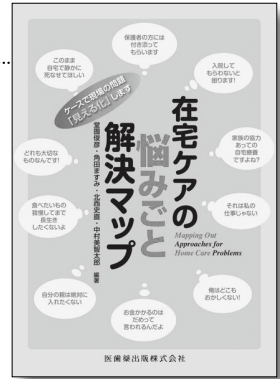


『在宅ケアの悩みごとと解決マップ』 ケースで現場の問題「見える化」します』

堂園俊彦・角田ますみ・北西史直・中村美智太郎 編著

●定価 3,520 円(税込み) ●B5 判 160 頁 ●医歯薬出版刊

●発行年月：2023 年 3 月 ●ISBN978-4-263-73212-0



優しさや温かさを感じながら倫理的問題を考える書

本書は人の尊厳が損なわれている状態である倫理的問題を扱っていながら、タイトルにあえて「尊厳」「倫理」という言葉を使っていない。執筆者の方々の専門分野は、哲学、倫理学、医療倫理学、生命倫理学、教育思想、社会学などであり、倫理の専門書であれば、専門外の私が書評を書くことはなかっただろう。

実際、在宅ケアの現場では、倫理的問題に直面することが多く、誰でも悩みごとを抱えている。本書は、ケースを通して、身近にあるさまざまな倫理的側面について、もやもやしていたものがスッキリしていく感覚を味わえる。倫理的問題を見える化し、その問題を考えるためのヒントが詰まった実用書である。

第2部は倫理的問題の場面が16のケースとして紹介されている。例を挙げると、「どれも大切なものなんです!」「それは私の仕事じゃない」「お金かかるのはだめって言われるんだよ」「うちのやり方でやってちょうだい!」など。各ケースの「悩みごと」はセリフのような表現で、倫理的問題を抵抗なく、読み進めていくことができる。似たようなケースに遭遇した読者も多いのではないだろうか。

現場では、本人が自らの意思を明確に表明できない、介護放棄・放任や経済的虐待が行われている、外国人の妻と医療・ケア従事者との間の介護方針をめぐる対立がある、患者・家族による在宅医療・ケア従事者への暴力・ハラスメントなど、患者・家族、在宅医療・ケア従事者一人ひとりが多様な問題に直面する。だからこそ、関係者で話し合うことが重要である。そのため、第3部は教育目的と解決目的のそれぞれの話し合いができるように、ケースを用いた学習法が展開されている。

興味深かったのは、問題対応のハードルを下げるエフェクチュエーション(effectuation)という考え方である。問題の完全解決ではなく、とりあえず今できることから試みて、行動しながら、その時々状況に応じて対応策を変化させていくことで結果を出すのである。また、「最善の利益」を判断する際、こどもの年齢に応じて親が果たす役割が異なるという視点である。地域で生きる障害児がやがて成人障害者になり、包摂する地域づくりが重要になるとの指摘を含め、多くの示唆に富んでいる。

本書は、患者本人だけでなく、家族や医療・ケア従事者も等しく大切にされなければならない(等しく尊重する)という優しさや温かさを感じながら倫理的問題を考えることのできる、私が最も推薦したい書である。

(三木明子／関西医科大学看護学部・看護学研究科)